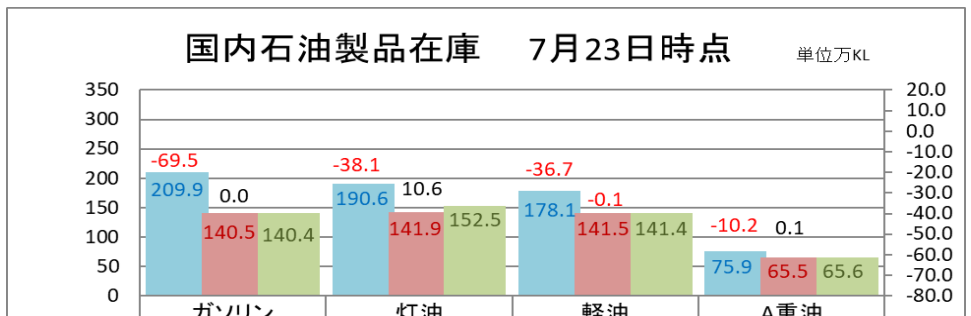
イデックスオイルレポート　~For a week~

2022/7/29作成　(株)新出光

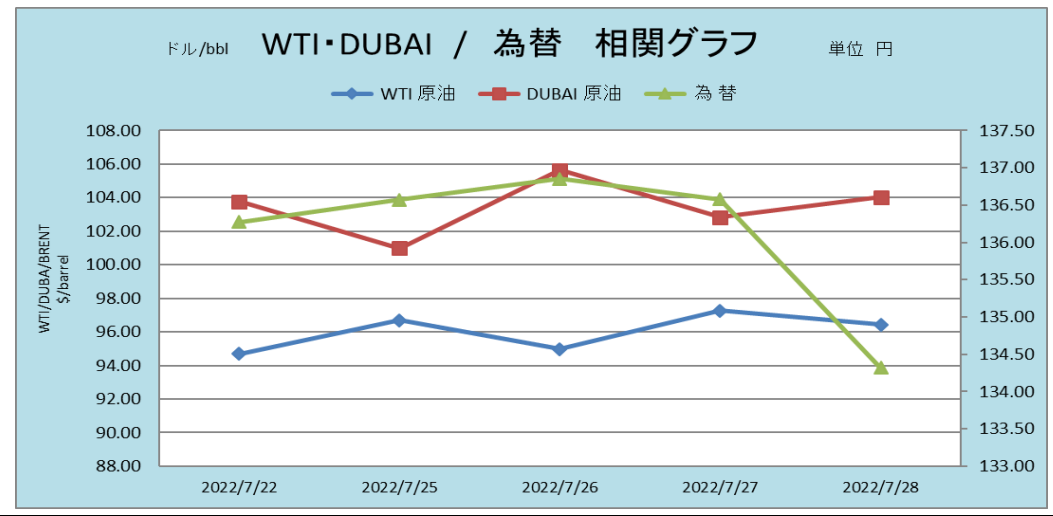
【概況】＜ロシア産天然ガス供給不安～米国景気後退＞

●22日、S＆Pグローバルが同日発表した7月のユーロ圏製造業購買担当者景況指数(PMI)速報値は市場予想を下回り、域内の景気減速懸念が台頭。7月の米総合PMI速報値も47.5となり、業況の拡大・縮小を判断する節目の50を約2年ぶりに割り込みました。(ロイター通信調べ)。こうした低調な指標を受けて、世界経済が景気後退しエネルギー需要が鈍化するとの警戒感が再燃し相場は94.7ドルへ下落しました。
●25日、ロシアからのエネルギー資源供給をめぐる懸念が相場を支えました。ロシア国営天然ガス独占企業ガスプロムは、タービンの技術的な問題を理由に、「ノルドストリーム1」経由でのドイツ向けガス供給を供給能力の20%にまで縮小すると発表。これにより、ガスから原油への切り替えが一層加速するとの観測が台頭し相場は96.7ドルへ反発しました。
●26日、ロシア国営天然ガス独占企業ガスプロムのドイツへのガス供給量の件で、欧州連合(EU)加盟国は26日、ブリュッセルでエネルギー担当相による閣僚理事会を開き、各国の天然ガス消費量の15%削減を目標とする節減案で合意しましたが、現状では供給不足への懸念があります。26日のニューヨーク商業取引所の原油先物相場は、低調な米経済指標や米戦略石油備蓄(SPR)の追加放出計画などを背景とした売りに値を消し相場は94.98ドルへ反落しました。
●27日、ドイツの業者が27日、「ノルドストリーム」を経由したロシアからのガス供給量が最大能力の2割に減少したと報告したことが供給不安を高めました。また、米エネルギー情報局の在庫週報が午前に公表された後は、じりじりと値を切り上げる展開。EIA調査でも原油在庫は450万バレル減と、市場予想(ロイター通信調べ)の100万バレル減を大きく上回るマイナスとなり需要の回復を示す内容で相場は97.26ドルへ反発しました。
●28日、米商務省が28日発表した2022年4～6月期の実質GDP(国内総生産)速報値は、年率換算で前期比0.9%減と、前期(1.6%減)から2四半期連続でマイナス成長となりました。2四半期連続のマイナス成長は「テクニカル・リセッション(技術的な景気後退)」とみなされており、エネルギー需要が減退するとの見方が改めて広がり相場は96.42ドルへ反落しました。

7月29日	17:00現在	WTI原油	105.70ドル	為替　1ドル	135.61円



	ガソリン	灯油	軽油	A重油
前年	209.9	190.6	178.1	75.9
先週	140.5	141.9	141.5	65.5
今週	140.4	152.5	141.4	65.6
前年比	-69.5	-38.1	-36.7	-10.2
前週比	0.0	10.6	-0.1	0.1



	次回元売変動予測 8/4～	元売変動予測
ガソリン	→	+2.1
灯　油	→	+2.1
軽　油	→	+2.1
A 重 油	→	+2.1
L S A	→	+2.1

※原油コスト「+1.5円」(サウジ調整金+1.8含む)
※激変緩和補助金「-38.4円」
※現時点での予測です。

【製品卸価格】＜8月もスポット市場のタイト化が続く＞

≪今週≫今週の元売り仕切り改定は3社ともに原油コスト「+2.5円」、補助金「-39.0円」、都合「+0.1円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの25日時点の小売価格平均は170.4円となっております。
今週は、各油種品薄感が強い中で高値での取引が進んでいます。スポット市場で流通しない為、系列対比で割高な調達が浸透し、一部では月内受注を控える動きが増えています。
≪7月30日以降≫次回の元売り改定は、原油コストは、1.8円のサウジ調整金込みで「+1.5円」の値上げ改定予測で、激変緩和補助金は「-38.4円」の見込みで、都合「+2.1円」の値上げ改定の予測となっています。8月のマーケットですが、各油種タイト気味のため市況は堅調に推移していくものと思われます。ガソリンは、ショートポジションのためENEOSは海上で、出光興産は陸上で不足分を市中調達すると見込まれており市場に出回る玉は、引き続き少なくなる見込みです。灯油のうちジェット燃料は、輸出重視傾向。一般灯油は、冬場に備え北国向けのため込みに入ります。軽油は、海外高のため輸出重視。直近では、ENEOS堺・水島で装置不調がありA重油も含めさらにタイト化する見込みです。一方、盆過ぎからガソリンについては、輸入玉が入ってくる可能性もあります。下旬には、太陽石油四国事業所の定修が終了する予定です。

【次世代エネルギー】＜三菱商事の貨物船に翼帆型の風力推進装置「ウインド・ウイングス」＞

海上物流のGHG(温室効果ガス)削減に向け、三菱商事の貨物船に次世代型の「帆」を搭載することが決まりました。ノルウェーの肥料大手ヤラ・インターナショナル子会社のヤラ・マリン・テクノロジーズは2022年6月21日、両社が開発した翼帆型の風力推進装置「ウインド・ウイングス」を設置する初の船舶が、三菱商事の保有する8万重量トン型ばら積み船(バルカー)「Pyxis Ocean」になったと発表しました。
ウインド・ウイングスは「硬翼帆」と呼ばれるもので、高さは45m。これを2基、甲板上に搭載した「Pyxis Ocean」は、2023年初頭から穀物メジャーの米カーギル向けの輸送に投入されます。風力推進と航路の最適化を組み合わせることで、バルカーやタンカーなどの大型船舶の燃料消費量を最大で30%削減する効果を見込んでいます。貿易の90%を支えている国際海運は年間約8億トンものCO2を排出しています。世界全体で占める割合は約2.2%と、ドイツ1国分の排出量に匹敵。IMO(国際海事機関)では2050年までにGHG総排出量を2008年比で50%以上削減することを掲げた「GHG削減戦略」を2018年4月に採択しており、船会社や造船所は、省エネ効率を高めた環境に優しい船舶や、水素やアンモニアといったカーボンフリー燃料エンジンの開発を進めています。他では商船三井は、帆走中に船内で水素を作り、その水素を燃料として活用するゼロエミッション船の開発計画「ウインドハンタープロジェクト」にも取り組んでいます。

[出典]　① https://article.auone.jp/detail/1/2/5/90_5_r_20220626_1656227821603215

© 2022 SHIN-IDEMITSU Co.,Ltd.ALL rights reserved.